



2024

韓国の若者の心 つかんだJ-POP

韓国の若者の間で、J-POPの人気が高まっている。2人組の人気音楽ユニット「YOASOBI」のコンサートは即完売し、ソウルの学生街ではJ-POPが流れるバーも盛況だ。かつては禁じられた日本の音楽がなぜ今、若者の心をつかんでいるのか。

コンサート即完売 ■愛好家バー盛況

「知らず知らず隠して、本当の声を響かせてよほら」。昨年末の紅白歌合戦にも出場したYOASOBIがソウルで昨年12月、2日間にわたって開いた初の韓国公演。4千人超のファンらで満席となった会場に、ヒット曲「群青」を大合唱する若者らの声が響き渡った。

チャート17位に

当初コンサートは1回だけの予定だったが、チケットは発売開始後わずか1分で完売。追加公演が決まったが、そのチケットも1分で売り切れた。4年前からファンだという大学生の権寧炫さん(23)は普段からJ-POPをよく聴くという、YOASOBIは「ユーチューブで偶然見つけた」。会員の韓在弼さん(25)は「以前は『日本の歌を聴いている』という、マイナーで恥ずかしい雰囲気があったが、SNSに上げられなかったが、今はそんな雰囲気はなくなった」と話す。

韓国でYOASOBIの人気が火が付いたのは昨年。K-POPアイドルらがヒット曲「アイドル」にあわせて踊る動画をTikTokに次々に投稿したのがきっかけだ。YOASOBIのメンバーでコンポーザー(作曲家)のAyaseさんは取材に、特に昨年

に入って「インスタグラムで韓国の方から『いつも聴いています』というメッセージがたくさん届くようになった」と話す。

人気はYOASOBIだけにとどまらない。シンガー・ソングライター・imaseの「NIGHT DANCER」は昨年、J-POPで初めて、韓国最大の音楽配信サイト「Melon」の総合チャートの上位100位以内に入った。最高17位を記録したが、これもヒットのきっかけはTikTokだった。

TikTok契機 昨年「急激な変化」

「会話はほぼ満席だ。『会話は日本語だけ』というルールがあり、若者が日本の音楽談議に花を咲かせている。

理解広がる国内

キム・イエスルさん(33)は、小学生の頃からアイドルグループ「SUPER EIGHT(旧・関ジャニ∞)」のファン。CDを買いそろえ、メンバーが出るバラエティ番組を見て日本語を学んだ。小学生の頃はカラオケで日本語の歌を歌うと、「売国奴」と言われ

親の影響 「罪悪感」ない世代

戦前や戦中の日本に植民地支配された時代に、日本語や日本文化の受け入れを強制された韓国。戦後長らく日本の音楽やドラマなどの大衆文化の流入は厳しく制限されてきた。

だが1987年の民主化を経て、90年代には日本文化に触れる若者が増加。特に韓国でヒットしたのがロックバンドの「X JAPAN」だった。海賊版のテープが出回り、韓国語講師の李琇珍さん(43)は「隠れてX JAPANやSMAPの音楽を聴いていた」と

当時を振り返る。日本の大衆文化の開放については国民の意見が二分されていたが、98年に当時の金大中大統領が「日韓共同宣言」で日本の大衆文化の段階的な開放を宣言。2004年に日本語の音楽CDが全面開放された。

「日韓ポピュラー音楽史」などの著書のある北海道大学大学院の金成政教授は、「市民レベルではすでに文化交流が進んでおり、90年代には文化を禁止する正当性がなくなっていた。大衆が主導した文化開放だ」と指摘する。

韓国の若者がJ-POPを支持する理由について、金さんは、90年代に日本の音楽に親しんだ世代を親に持ち、「罪悪感」がない点を指摘する。またSNSの普及に加えて、J-POPそのものの魅力や独自性も大きいという。アイドルグループ中心のK-POPと違い、「例えばアコースティックギター一本で勝負するあいみょんなどは、今の韓国にはない新鮮で魅力的な音楽に映っている」と話す。(ソウル＝太田成美)



ソウルの学生街・新村にある日本語だけで会話するバー「レスト」。多くの韓国人の若者が集まっていた＝2023年9月26日、太田成美撮影



▲2023年12月16日、ソウルで開かれたYOASOBIのコンサート。写真＝太田成美撮影

▲2023年12月16日、ソウルで開かれたYOASOBIのコンサート。写真＝太田成美撮影